



## 子どもの対人関係を支える： つなぎ手としての教師の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武田, 諭子, 村田, 昌俊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008187">https://doi.org/10.32150/00008187</a>

## 子どもの対人関係を支える

### — つなぎ手としての教師の役割 —

Supporting the Inter-Personal Relations of Children:

The Role of Teachers

武田 諭子 (Satoko Takeda)

旭川市立常盤中学校

村田 昌俊 (Masatoshi Murata)

旭川市立常盤中学校

不登校を体験した子どもたちへの援助を続ける中で、筆者自身が体験した子どもと過ごした日常生活の事実に基づいて、子どもたちの発達を援助する大人の役割について問題提起したい。

不登校を体験した子どもたちの発達援助を行う機関として、旭川市には情緒障害学級と適応指導教室がある。情緒障害学級(通称 不登校学級)には、子どもたちが居住する地元の在籍校で不登校を体験した子どもたちが通学している。不登校のきっかけとなった理由の多くは、友人関係や教師との関係をめぐる問題であり、子どもたちの多くは対人関係において自信を喪失し、自己否定感情が強い場合が多い。子どもたちの成長に向けて寄り添う発達援助者としての教師の役割や、一人ひとりの教師がチームアプローチを通じて子ども同士や子どもと大人、子どもと社会との「つなぎ手」としての機能を担っていることについて事例を通じて報告する。

(キー・ワード : 対人関係 つなぎ手 不登校 不登校学級)

#### 1. はじめに

人は一生涯を通じて、様々な人との出会いや別れという体験を通じて多くのことを学んでいきます。特に心も身体も著しく発達する思春期にある子ども達にとっては、彼らの成長のモデルとなる大人との出会いや生活、同世代や同学年の子ども達との関わりは大変重要なものであると考えます。その中でも子ども達の成長にとって重要なのが、同世代・同性の友人との出会いであり、彼らとの交流です。多くの青年期研究者や発達援助先駆者の研究報告、実践者の事例報告の中では、前青年期から青年期に向かうこの時期に、友人との出会いや仲間意識を持つことは大変重要な体験であると報告されています。

筆者自身も思春期以降の同世代・同性との交流は、心理的な成長を果たす過程において、心理的開放感や親密感を味わうことを通して、自分を見つめ、悩みや未来を語る重要な因子となると考えています。また、子どもの成育の過程では、それまでの親や教師等との大人との関係での保護や服従の関係から、横並びで対等な関係である友人との関係において、自分を自由に語ったり、相手の話を聴き取り、互いの内面や秘密の共有を通して、自己主張や妥協といった

ような対人関係の基本技能を身につけていくことができます。さらに、対人関係の葛藤や喧嘩・仲直りといった体験をもちながらも対人関係のネガティブ感情を乗り越える力を身につけることができます。

しかし、筆者らの関わっている不登校を体験した子どもたちは、対人関係において自信を失いがちで、心の傷を背負い、人と関わることに不安や怖れを感じ、臆病になっていることが多いと感じます。このことは本来、筆者の関わる不登校を体験した子ども達が対人関係形成能力に欠けているわけではなく、潜在的な能力は持ちながらも、なかなかうまく表現できないというのが現状だと考えるべきです。そこで、その潜在能力をうまく引き出すのが、発達援助者としての教師の役割です。子どもに寄り添い、子どもの話を十分に聞き取り、深く理解した上で、子どもとの信頼関係を築き、子どもたちの思いをつなぐ仲介者としての役割を担っていきます。子ども達に勇気を与え、子どもと子どもをつなぐ「つなぎ手」としてタイミング良く背中を押してあげることは私たち不登校学級の教師の重要な仕事です。

#### 2. 不登校学級について

不登校学級は、何らかの心理的要因で地元在籍校に登校することができなくなった生徒が通う学級です。子ども達の生まれ育った環境についてはさまざまであり、子どもたちは複雑な生育歴などから来る心の傷を抱えている場合が多いと思います。子どもたちは様々な課題や悩みを抱えて学級に入級して来ます。その心の傷の深さや不登校となった時期、理由やきっかけについては様々であり、どれ一つとして共通な事例はありません。多くの悩みを抱えてきて解決することができた子ども、今、悩みの渦中にいる子ども、不安が強く苦しんでいる子どもなど、様々な子ども達が集まって生活しています。

学級の教師は子ども達のありのままの姿を受容し、一人ひとりの子どもたちに応じた関わりについてチームとしてその課題を共有し、毎日のミーティングを通じて、子どもたちが安心して生活できる場作りを目指して努力しています。また、教科学習は個別指導を中心にを行い、遊び・制作・身体活動・季節や子どもの状態に合わせて体験を組み込みながら教育実践を行っています。不安の強い子ども達には、じっくりと根気強く付き合おうという心構えで、家庭訪問指導や1対1の個別指導を継続的にを行っています。これらの活動を通して、子ども達の不安や緊張を取り除き、自信が持てるような経験の機会を持ち、好ましい人間関係を育てながらエネルギーを回復し、一人ひとりが将来にわたってのびのびと主体的に生きていく力を培うことを目標としています。

### 3. 子ども集団の動き

思春期の頃の友人関係は、防衛的な付き合い方と同調的な付き合い方を特徴とされています。

学級の男子は2・3人ずつのグループがあっても皆で同じ部屋にいて、仲がよい集団を形成し続けています。仲間はずれのようなことはなく、男子は一年中、1つの大きな男子のグループとして成立しています。そして、子ども達だけで遊びや運動を共有して一緒にいることもできています。しかし、その時間が長く続くと、子ども達には少しずつ不安な顔が見られます。やはり、そこには教師の存在がまだ必要なのだと感じます。男子の付き合い方は、お互いをぶつけ合う

ような深い付き合いではなく楽しさを共感しあう防衛的な付き合いであるように見えます。

一方、女子には男子のように全員で何かに取り組み、それをみんなで楽しむといった様子はあまり見られません。大きなグループでの遊びや運動は、教師が介在した時には成立しますが、子ども達だけではなかなか難しい部分があります。大きなグループでいるのではなく、2人組などでいる子ども達や特定の友達がいらない子ども達(1人での子ども達)が多いです。2人組で仲の良い生徒には喧嘩はありますが、今も変わらずずっと仲の良い子ども達もいれば、いざこざがあつて仲が悪くなった子ども達もいて、友人関係は男子より著しく変化しています。また、女子の中には、友達と上手く付き合っているが、実はその人との相性が悪く、その人と話すのに胃がきりきりするくらいエネルギーを使う子どもが男子よりも多く見られます。その付き合い方は、周りに合わせようとする同調的な付き合い方であるように見えます。

以上で述べたように、男子と女子には集団形成のあり方に多くの点で違いが見られ、各年度ごとに様々な特徴があるようです。

### 4. 学級での子ども達の対人関係

私が出会った子ども達の対人関係の様子をほんの一部ではありますが紹介します。少しずつ家族以外の他者との関わりを持てるようになった子ども、友達との関係を持つことはできるのですが、友達との距離をなかなかうまく持つことができない子ども、相手に気を遣いすぎたり、相手に調子を合わせすぎてしまい、エネルギーを使いすぎて、疲れてしまう子どもとさまざまな子ども達があります。しかし、どんな形であれ、子ども達が自分から友達に話しかけ、他者に対してアプローチし、何かの行動を自分から起こすようになったことは大きな成長の証なのだと思います。また、ここからが子ども達の一步なのだ実感しています。

#### (1) 事例A

出会った当初のAさんは、母がいなくなると不安になり、常に学級でも母と離れずに一緒にいるという状態でした。教師との関わりも持つことが困難であり、目を合わすこともなく、その表情はとても固いものでありました。母は毎

日Aさんと一緒に学級に通うことを続けてくれました。母が常に隣にいる状態で学級での毎日を過ごす中で、少しずつではありますが、母を含めての、教師-Aさん-母の3者関係でバトミントンをするようになっていきました。しかし、その顔は浮かず、まだ笑顔を見せることはありませんでした。そのように、バトミントンを通して、3者関係を続けていくうちに少しずつAさんに笑顔が見られるようになりました。そして次には、母を含めた、クラスの仲間、大学生ボランティア、教師の集団の中でトランプをする機会を持つことができるようになりました。しかし、まだこの段階では、母や教師以外の人とは会話をすることはありませんでした。この頃から、Aさんの活動範囲が広がり、一人でたくさんの絵を描くことに没頭するようになっていきます。教師も、Aさんの得意な絵を誉め、その素晴らしさを本人に伝えることを大事にしました。そして、Aさんは、得意の絵を生かしたプラバンづくりにも挑戦するようになっていきました。絵を描く時の表情もとても柔らかく、教師にも新しく描いた絵をどんどんと見せてくれるようになりました。

1ヶ月後、Aさんは母がいなくても学級にいれるようになります。そして、体力に自信がないと話していたAさんではありましたが、動物園までの長い距離を自ら、自転車で参加する事を決め、見事完走することができました。この時、Aさんは自分の手で自信を獲得することができていたのだと思います。母と離れることができるようになったAさんは、次には、教師との一対一でべったりといるようになりました。手紙で自分の思いを表し、それを教師に渡し、伝えるという行動も現れるようになりました。そして、教師が側にいないと、一人になるのではないかという不安から時折、泣くことも見られるようになりました。それと平行して、教師を介すればクラスの仲間と一緒にいられるという成長も見られるようになりました。

2ヶ月後、今まで拒否していた学習にも取り組み(アルファベットの学習)、アルファベットを書けるようになり、学習面でも少しずつ自信を持ってたようでした。

3ヶ月後、Aさんは、入院前は入院したくないと泣き、入院を嫌がりますが、入院をします。し

かし、病院で年上と年下の女の子と仲良くなったということもあり、お見舞いに行ったときにはとても元気で、しっかりした様子が伝わってきました。そして、1学期終了前に退院し、夏休みを迎えます。

2学期、夏休みから持った携帯を通して、同じ学年のクラスの仲間と接近します。この段階では、友達から話しかけてきてくれるのを待っている状態でした。しかし、少しずつ友達との距離も縮まり、一緒にバスで登校したり、学校外でも遊ぶようになり、教師がいなくても友達と一対一でいれるようになっていきます。そして、教師が側にいないからと言って、泣くこともほとんどなくなります。

そして今では、自ら友達に話しかける姿が多く見られるようになっていきます。その結果、同学年の友達とだけではなく、先輩とも話したり一緒に行動することができてきています。

## (2) 事例B、C

Bさんは、仲のよかった先輩が卒業して、なかなか気の合う友達が次にはできず、一人であるか教師といるという状態でした。2学期に入って転入してきたCさんには、優しい言葉をかけたりと少しずつ接近していきます。Cさんも転入してきて、少しずつBさんと仲良くなりたいと思っはいましたが、なかなか上手に関われず、一人である状態が続いていました。お互い一人ではいますが、学級で顔を合わすことを繰り返す中で、携帯でのメール交換を通してお互いを意識し始めるようになります。しかし、メールでは会話ができるのに、直接顔を合わせると会話に困ってしまうという状態が続きます。なかなか、ぐっと近づくことができない二人ではありましたが、少しずつあいさつを交わすことはできるようになります。しかし、話はまだできていないという状態でした。そこで、教師が二人の間に入って、話題を提供し、「Bさん-教師」、「Cさん-教師」という関係で会話をする機会を持ちます。そこから、「Bさん-教師-Cさん」の三者で話ができるようにもなります。そして、話題も彼女たちが提供してくれることが増えてきます。この経過の中で、教師はBさん、Cさんのお互いの良さを相手に伝えたり、二人の趣味や好きな音楽が似ていることをそれとなく伝えるという働きかけをします。

また、教師の勧めから、2人で下校をするという姿が見られるようになります。そして、ついには、2人で「帰ろう」と言って、帰ることもできます。また、遊ぶ約束をするようにもなっています。もともと気が合いそうであった二人は少しずつ学年差を超えて仲良くなっていきます。

### (3) 事例D

Dさんは、1年間、クラスの仲間とはほとんど関わりを持つことがない状態でした。その1年をかけて、教師がたっぴりとDさんに関わり、その子の丸ごとを受け止めるという姿勢でDさんに向き合ってきました。特に、Dさんの好きな手芸と一緒にじっくりと寄り添い、その中で、手芸という特技を身につけることで、自信をつけることができてきたのだと思います。その1年後には、友達に自分からあいさつをしたり、友達の帰りを見送ったりする姿が見られるようになりました。また、「一緒に～をしよう」などとクラスの仲間を誘うという行動もできたり、友達と体育をしたりとその子本来の活発な部分も見えてきました。そして、本人も「今が一番幸せだ」と話してくれています。

### (4) 事例E

Eさんは、友達に自分から話しかけていくことはできるのですが、友達との距離をなかなか上手にとれずに、疲れてしまうという状態にあります。そして、仲良くなった友達との関係も嫌になることがあり、嫌になった時は学校自体が憂鬱になり、調子も悪くなることがあります。しかし、またその子との関係は戻ったり、またくっついたりとそれを繰り返しています。教師は友達との距離の取り方などを伝えていこうとしているところです。

## 5. 教師対生徒の関わり

子ども達の対人関係を支えていくためには、第一に、教師が子ども達と一対一でじっくりと関わり、寄り添うことが大切です。そのためには、以下に述べる視点を持つことが重要であると考えます。

### (1) 子どもが安心していられる空間づくり

対人関係を含めたさまざまな経験の中で、心の傷を抱えてしまった子ども達に、第一に必要なとされるものが子どもが安心していられる空間

づくりであると考えます。その空間とは、子ども達が緊張せず、リラックスして生活できる場であり、子ども達が自分の居場所であると思えるような場であると考えます。教師は、そのような空間づくりに努力し、子ども達が学級に来ることを楽しめるような雰囲気づくりをしていくことが大切です。そして、その空間の中で、子ども達がゆっくりとエネルギーを回復する事ができるということが何よりも大切になります。そのためには、教師が子ども達の丸ごとを受け止め、子ども達の心の支えになることが大切です。

### (2) 子ども達に自信を持たせる

子ども達は、心の傷を抱えると同時に、自分の存在価値を見失ってしまったり、自分自身に自信を持ってなくなってしまうことがあります。そういった子ども達が自分の長所を再確認し、自分を肯定できるようになることを意識しての働きかけが必要になります。教師自身が、普段から子どもたち一人ひとりのよさや努力点を見つけようとする姿勢が大切です。そして、そのよさを精いっぱい誉め、子どもたち一人ひとりのよさを子どもたち自身に伝えていくことが必要であると考えます。子ども達の特技や好きなことを見つけさせることやそれを尊重してあげることも大事なことだと考えます。さらに、子どもたちがさまざまな体験をする中で自ら自信を持って生きていけるように教師は子どもたちに関わることが大切です。

### (3) お互いに心を開くことのできる関係づくり

教師は、垣根のないまるで親子のように、仲のよい友達のように、時には厳しく、人生の先輩のように子ども達と関わっています。このように様々な形の関係をとることで、教師一生徒というバランスを保っています。そのどんな関係の中でも、教師は子ども達が心を開放して接することができ、弱音を吐けるような関係を築き上げることが大切になります。そして、日常の関わりの中で、子ども達が抱えている問題等に気づき、対処していくことのできる教師でありたいものです。また、お互いを一人の個人として尊重し、心と心のつながりからくる信頼関係を築くことが大切です。そのためには、子どもの心をつかむことも大事ですが、教師も偽り

のない自分自身を子どもたちに見せていくことが必要になると考えます。

## 6. 子ども達同士の関わり

子ども達の心の傷が回復し、自信も少しずつ回復してきますと、次の段階として、教師は子どもと子どもをつなげていくことが必要になります。しかし、いきなり「子ども—子ども」という関係を強要するのではなく、「子ども—教師—子ども」といった教師を介在した関係を最初に築くことによって友だちづくりの第一段階をスムーズにさせることが必要になります。「子ども—教師—子ども」という形で教師が介在して、話の話題もその子達に共通な話題を見極めて提供し、話を始めるという話を促進させる役割が必要です。

また、教師は、子ども達が作業や遊び・運動や体験などと同じ場所でお互いに努力して何かを達成し、そのことについて共感して友だち関係を深めていけるような場所を多く用意します。そして、その場に教師も一緒にいて、子ども達とたくさんの活動を共にすることが大切になります。その時には、教師が行動をリードする事も必要になります。

そして、これらの活動を通して、教師が子ども達その子その子の良さをそれとなく友達に伝えたり、友達というものの素晴らしさを伝えていくことが大切であると考えます。教師には、子ども達が少しずつ、友達との関わりを持つことができるようにゆっくりと見守っていく姿勢が必要なのです。

## 7. まとめ

教師が対人関係や様々な経験の中で、傷ついた子ども達の心の傷の回復を支え、対人関係を今一度築き上げていくためには、教師間の共通理解や親と共に子どもを見守るという、子ども達に関わる大人達の連携がとても必要になります。それは、子ども達が教師からの愛だけではなく、何よりも親からの愛を受けながら元気を取り戻していくものだと考えるからです。そのためには、教師は、子どもと共にパワーを失ってしまった親の心のサポーターでもある必要性を感じます。

教師や親に支えられながら、心の傷を回復し、

自信を回復することで、子ども達の心の奥にある友達と関わりたいという思いをたくさん叶えられる手助けをしていくことが教師の役割なのだ改めて感じています。友達と一緒にいる時には、子ども達はとてもいい顔をしています。やはり、友達の存在は大きいものです。子ども達にはいつでも私たちが見守っているということを忘れずに、少しずつ、肩を張らなくても、様々な年齢の人々と関わるできるようになってほしいと思います。その中で、たくさんを感じ、大切なことを学んでほしいと思います。そして、何よりも友達との関係の中でさらなる元気や自信をつけてほしいと願います。

## 文献

- 1) 三浦 務・鈴木実加子・外山慎一(1987):旭川市における登校拒否学級(情緒障害学級)の実践, 情緒障害研究紀要第6号.
- 2) 皆川邦直: 青春期と青年期の危機, 現代のエスプリ別冊臨床社会心理学, 「統合と拡散」至文堂.
- 3) 齋藤万比古(1997): 発達障害としてみた不登校, こころの科学73, 日本評論社.
- 4) 齋藤万比古・奥村直史・佐藤至子(1998): 不登校だった子どものその後, こころの科学87, 日本評論社.
- 5) 郡司竜平(2001): 不登校児に対する教師としての支援, 北海道教育大学大学院修士論文.
- 6) 村田昌俊・三浦 務・武田公孝・朝倉明美・林 耕司・伊藤健治・郡司竜平(2000): 不登校学級卒業生のその後, 情緒障害研究紀要19号.
- 7) 新井邦二郎(2001): 今, 子どもにとって友だちとは, 児童心理5月号.
- 8) 桜井茂男(2001): 小学生の友だち関係・中学生の友だち関係, 児童心理5月号.
- 9) 保坂亨(1996): 子どもの仲間関係が育む親密さ—仲間関における親密さといじめ.
- 10) 辻村英夫・又吉正治(1996): カウンセリングと人間関係, 学文社.
- 11) 近藤邦夫(1994): 教師と子どもの関係づくり, 東大出版会.